



研究員 河井明夫

7月28日にホルムズ海峡を航行中の商船三井所有の巨大タンカー「M. Star」の船体が損傷した事件で、アルカーイダ系と思われる組織が8月2日付で犯行声明をインターネット上に掲載した。声明の真偽は確認できていない。複数の専門家は寧ろその信憑性に疑問を投げかけている。

声明文の名義は、「アブドゥラー・アッザーム旅団」となっており、同タンカーに対してアイユーブ・タイシャーンと名乗る男が自爆攻撃を仕掛けたと主張している。この自爆犯と思われる男がコンピューターの画面に映し出されたタンカー（M. Starと同型か否かなど事件との関連性は不明）の写真を指差している画像が同声明文に添付されている。この男が着ている服は、UAE国民が好んで着用する民族衣装のようにも見える。

<声明文が語る作戦の動機・背景>

「オマル・アブドルラフマーン攻勢」と名付けられた今回の「作戦」は、声明文によると、「ウンマ（イスラム共同体）においてジハードの灯火に火をつけた偉人の一人」であるオマル・アブドルラフマーンの名の下に実行されたという。エジプト人のオマル・アブドルラフマーンは、1993年のニューヨーク世界貿易センター爆破未遂事件との関係により長い間米国で服役している囚人である。声明文は、今回の作戦はこの「偉人」のことをウンマに思い起こさせるために実行されたとした上で、アブドルラフマーンが解き放たれる日は近いと吉兆を伝えている。

また声明文の前置きの部分では、今回の作戦はジハードの一環として、ムスリムの国を支配しムスリムの富を収奪する世界的不信仰体制を弱体化させることや、世界的不信仰体制の

抑圧者たちが盗んだ富に対するムスリムの権利を回復することなどを目的として実行されたと述べている。そして、今回の「成功」した作戦は、世界的不信仰体制の経済的結節点で実行されたことを強調している。

事件発生後、世界の通信社が大きくこの件を扱ったことにも言及し、世界経済および石油価格への影響の大きさから「神の敵」は作戦の真相を隠蔽しようとし、一部で損害は地震によるものだとされた点を指摘した。そして、今回のような最新で最大規模のタンカーへの攻撃は即ち世界的不信仰体制にとっての大失敗であるとした。更に現場のホルムズ海峡は世界不信仰体制にとって経済の大動脈、海運にとって世界で最重要地域のひとつであり、「敵」の艦隊が一杯いるとした上で、「神がムジャーヒディーン（ジハード戦士）の側につかなければ、この頑丈な地域を突破することは至難であっただろう」と自分たちの作戦を高く評価している。

声明文の最後の方で、犯行グループは、声明の発表が遅くなったことについて、実行犯たちが自分たちの拠点に無事帰還するのを待ったためだと説明した。

<アブドッラー・アッザーム旅団とは？>

今回、犯行声明を出した組織、「アブドッラー・アッザーム旅団」は、アフガニスタンでソ連占領軍と戦うムジャーヒディーンを率い 1989 年に戦死したパレスチナ人の名前に因んでいる。アッザームは一時期、オサーマ・ビンラーデンの精神的な師匠とみられていた。

ジハード主義者の中で高い尊敬を得ているアブドッラー・アッザームの名を抱く組織は複数存在する。

2005 年 7 月と 8 月にそれぞれシャルムツシェイフ（エジプト）とアカバ港（ヨルダン）で実行した攻撃は、「殉教者アブドッラー・アッザーム旅団 シャームの国とキナーナの地のアルカーイダ」という組織名で犯行声明が出されていた。シャームとはシリア周辺諸国、キナーナの地とはエジプトのことを指す。商船三井タンカー「襲撃」事件で犯行声明を出した組織は「アブドッラー・アッザーム旅団」と名乗っており、「殉教者」という呼称の有無という違いがある。

また、これら 2005 年夏の事件のそれぞれの後に出された 2 つの声明には、今回の声明にあるような、地球儀上に銃とコーランをあしらった「アブドッラー・アッザーム旅団」のロゴが付されていない。

これらのことから「殉教者アブドッラー・アッザーム旅団 シャームの国とキナーナの地のアルカーイダ」と「アブドッラー・アッザーム旅団」が全くの別組織と推定される。2009 年 10 月にイスラエル北部がロケット弾で砲撃された事件で出された犯行声明には、「アブドッラー・アッザーム旅団」のこのロゴが使われており、商船三井襲撃事件で犯行声明を出した組織と同一の組織とみることができよう。

2010 年 4 月には、「アブドッラー・アッザーム旅団」の野戦司令官、サーリフ・カルアーウィーへのインタビューなる文書が、イスラム過激主義者が多く利用するネット掲示板に掲載された。この中で、カルアーウィーはアラビア半島で米英など多神教徒の観光客を拉致することは自分たちにとって名誉でありジハードの一種であるとした上で、各地に散らばっている米国権益は自分たちにとって最も重要な標的である、などと述べていた。

「アブドッラー・アッザーム旅団」が犯行を認めた攻撃は、確認されたものとしては 2009 年秋のイスラエル北部を狙ったものだけである。しかも、その攻撃が実際に同組織によって実行されたものかどうかについては裏付けがとれていない。今回の事件についてもタンカーの船体にできた損傷に関する調査の最終結果が出るまで、或いは同組織が犯行の模様を収めたビデオ映像などの決定的な「証拠」を示さない限り、同組織による「テロ」とは断定できないと言えよう。

<爆発原因をめぐる混乱>

事件は 28 日未明にホルムズ海峡のオマーン領海で発生した。その際、船体右舷がくぼみ、救命艇 1 隻が爆発し海に落ちたり、船内の窓やドアが破損したりするなどの物的損害が生じた。同タンカーは約 230 万バーレルの原油を積んでいたが、原油の流出はなかった。また、乗組員総勢 31 名のうちインド人の男性乗組員 1 名が軽傷を負った。

この事件については、発生後同タンカーが寄港したフジャイラ（UAE 東部）の港湾当局者

などが地震による高波の結果だと主張し、外部からの攻撃によるという見方を否定していた。またオマーンの沿岸警備隊も、同タンカーに対する攻撃があった証拠はないとした。

一方、商船三井では、爆発音の後に乗組員が光を見たとの証言を明らかにし、外部からの攻撃の可能性を主張、地震による事故との見方を真っ向から否定していた。そして、同社は軍事専門家から構成される調査委員会を設け事故原因の解明に努めていた。

今回、出された犯行声明は、そのタイミングやそれを出した団体の過去の活動歴・活動範囲を考慮に入れると、その信憑性は定かではない。タンカーの損傷箇所に焼け跡がなく、船体も貫通していないことなどから、現在行われているタンカー船体の調査が完了するまで、何が損傷の原因かについては断定できないという見方が支配的である。ある専門家によると、爆弾などによる爆発の場合、船体は貫通してしまうという。この専門家は、潜水艦などとの衝突の可能性を指摘している。

<なぜ日本が狙われたのか？>

今回の声明文では、日本のタンカーがなぜ狙われたのかについて全く言及がない。また、米国を含め非イスラム・西側諸国の中で名指しで非難されている国もない。しかし、日本が、声明文の中にある「ムスリムの国を支配している世界的不信仰体制」の一部と見られていることは確かであろう。また、日本が正当な商取引で入手した石油すら、ムスリムの手から奪われたものであり、今回の作戦はそれを奪回するためのものだとされている点は注目に値する。

(了)